

致平親王と和歌

— 撰関期親王の和歌活動への一視点として —

桜井宏徳

はじめに

村上天皇の第三皇子致平親王（九五—一〇四）は、上野太守・上総太守・兵部卿を歴任したのち、円融朝の天元四年（九八一）に出家して園城寺に入り、後朱雀朝の長久二年（一〇四一）に九十一歳の高齢で薨去するまで、同寺に住むこと六十年に及んだ。

この致平は、『新古今集』『続古今集』（ただし、後述のように同母弟の昭平親王と誤られている）『統後拾遺集』に各一首ずつが入集している勅撰歌人ではあるが、歌人としてはほとんど無名に等しく、その詠歌もこれらの三首以外には伝えられていない。しかし、村上朝から円融朝にかけて活躍した歌人たちの家集や、致平の存命中に編まれた唯一の勅撰集である『拾遺集』の詞書には、致平の名がしばしば見出され、致平が多くの歌人たちと交流を持ち、自邸でも歌会を催すなど、和歌活動に積極的に参与していたことが知られる。

平安期の親王の文学活動をめぐって、漢文学の分野では、すでに後藤昭雄氏によって、九世紀から一〇世紀にかけての親王たちと漢詩文との関わりが網羅的に概観されている。^①平安漢文学史上におい

て親王という存在が注目される理由について、後藤氏は「彼らは詩の実作者であるとともに、その社会的地位から、より重い比重をもって詩宴の主宰者、つまり詩作の場の提供者であるという二重の側面を持つからである」と述べているが、同様のことは、ほぼそのまま和歌についてもいえるであろう。九世紀の良房から一一世紀の頼通に至る撰関期をひとまずの範囲として見た場合、家集が現存している親王はわずかに元良親王と具平親王の二人に過ぎないが、かつては惟喬親王と盛明親王の家集も伝存していたことが、前者は泉州本及び日大為相本『伊勢物語』の勅物、後者は『花鳥余情』によってそれぞれ確認されており、また、家集の存否にかかわらず、さまざまな歌集や歌合などに親王の名を見出すことは容易である。みずからも和歌の実作者であると同時に、その皇親としての尊貴さと社会的地位の重さゆえに、歌合や歌会といった歌作の場の主宰者・提供者として、歌人たちの活動を支える立場にもあった当該期の親王の歌壇における存在と役割には、けっして軽からぬものがあつたものと思量されるのである。

右のような見通しのもと、本稿では、撰関期における親王と和歌

との関わりの具体相を解明するための一つの試みとして、致平親王の事例を取り上げ、多角的に検討を加えてゆく。

一 致平親王の歌三首について

まずは、現在伝えられている、以下の致平親王の歌三首について考察するところから始めたい。

① 『新古今和歌集』

をむなのほかへまかるをききて

兵部卿致平親王

おもひやる心もそらにしら雲のいでたつかたをしらせやはせぬ

(卷十五・恋五・一四一四)

② 『統古今和歌集』

選子内親王賀茂のいつきおり給ひてのち、たいめんありける

ついでに

入道兵部卿昭平親王

今日ぞおもふきみにあはでややみなましやそちあまりのよはひならずは

(卷十九・雑下・一八一三)

③ 『統後拾遺和歌集』

うゑおきて侍りける松の年久しくなりけるをみて

兵部卿致平親王

色かへぬ千年の友と思ひしに松もかひなく老いにけるかな

(卷十五・雑上・九六九)

右の三首はいずれも日常詠というべきもので、最も早い時期のものと思われる①は、若き日の致平の恋の一齣を伝えるものである。他出もなく、詠作時期や相手の「をむな」の素姓は不明というより

ほかないが、詞書の「ほかへまかるを」や歌の「いでたつかた」から推せば、あるいは「をむな」は受領となった父か夫に伴われて、地方に下向したのでもあろうか。なお、『大式高遠集』には、この歌と第一・二句を同じくする、

行宮見月傷心色

おもひやるこゝろもそらにけりひとりありあけの月をながめて
(二五七)

という歌が存する。高遠歌は『長恨歌』の句題による十首のうち一首で、致平歌との先後関係も定かではないが、高遠は致平より二歳年長の同時代の歌人であり、また、「おもひやる心もそらに」の歌句を共有する歌も平安期には他に見出せないことから、一方がいま一方の表現を撰取している可能性も充分に考えられよう。⁽⁵⁾

続く②は、長元四年(一〇三一)の大齋院選子(致平の異母妹)の退下に際しての歌である。『統古今集』はこの歌を致平の同母弟昭平の詠としているが、昭平に兵部卿の官歴はなく、しかも選子退下の十八年前の長和二年(一〇一三)にすでに薨じているので、これは明らかに誤りである。昭平も兄の致平と同様に出家して園城寺に入り、その後大雲寺に移っているため、似た経歴を持つ致平と混同されたものらしい。この歌は早く『栄花物語』にも、

齋院おりるさせ給て、御せうとの入道兵部卿の宮に対面せさせ給て、きこえさせ給ける、

けふぞ思ふ君にあはでや、みなましやそちあまりのとしなかりせば
(卷三十一「殿上の花見」)⁽⁶⁾

として見えているが、この文脈から見ると、選子が致平に贈った歌であるともなさざるをえない。だが、歌中の「やそぢあまり」は詠者自身の年齢をいうものであって、やはりこの歌は当時八十一歳（選子は六十八歳）であった致平の詠と解さなければならぬであろう。前述のように致平を昭平と誤ってはいるものの、この点に関しては『続古今集』の理解が妥当であり、本稿も当該歌を致平の詠と認定したい。この歌は『栄花物語』と『続古今集』以外には見出せず、『続古今集』と『栄花物語』との共有歌が一五首と比較的多いことからも、『続古今集』が『栄花物語』に拠っている蓋然性は高いものと思われるが、一方で『栄花物語』の現存諸本には本文異同のない第五句「としなかりせば」を『続古今集』が「よはひならずは」としていること、また、詠者が誰であるかについての理解が双方で大きく異なっていることに鑑みれば、『続古今集』が『栄花物語』とは別の資料に拠った可能性も排除がたい。

最後の③は、①と同じく詠作時期は不明ながら、老境に入ってからのものであるが、『続後拾遺集』に先立って『万代集』にも採られているが（巻十五・雑二・三〇八五）、詞書・歌ともに同一であり、『続後拾遺集』は『万代集』に拠っているものと見てよいであろう。⁽⁹⁾

以上、三首の致平歌のそれぞれについて概観してきたが、この三首に共通する点として興味深いのは、いずれもそれまでの歌書類には見えない歌でありながら、致平が生きた一〇・一一世紀から二百年余も時を隔てた一三世紀の勅撰集・私撰集に相次いで撰入されて

いることである。②のみは『栄花物語』に見えているとはいえず、これとても既述のごとく『栄花物語』では選子の歌であり、この歌が致平の詠として享受されていた可能性は低いであろう。

鎌倉期に入って致平歌がにわかにはクロースアップされた背景には、政教性が色濃く、延喜・天曆期に強い憧憬と敬仰の念が抱かれていた後鳥羽院歌壇・後嵯峨院歌壇において、致平が忘れられていた村上天皇の皇子としていわば発掘されてきたという事情もあるであろうが、⁽¹⁰⁾ それにしても、致平歌がどのようにして二百年余の間、散逸を免れて伝えられてきたのかという疑問は残る。

そこで注目したいのが、①③の致平歌と、六条藤家との関わりである。『新古今集』の撰者名注記によれば、①の歌を撰入したのは藤原有家であるという。さらに、有家の姉妹と藤原兼宗との間に生まれ、六条家系の歌人と目されていた忠定⁽¹¹⁾、

題しらず

前参議忠定

たかさごのまつもかひなしたれをかもあはれなげきのしる人に
せむ
〔万代集〕巻十五・雑二・三〇八四

は、③の致平歌を本歌としていたことが、安田徳子氏によって指摘されている。むしろ、致平歌の本歌でもある、

誰をかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

〔古今集〕巻十七・雑上・九〇九 藤原興風

をはじめとして類歌は少なくなく、忠定歌が致平歌のみに依拠しているとは断じたいが、「まつもかひなく（し）」という句を持つ歌は、『新編国歌大観』『新編私家集大成』によって検しても、そのほ

とんが「松」「待つ」の掛詞による恋歌であつて、嘆老の歌は致平歌と忠定歌以外には見出せない。この点からも、致平歌が忠定歌の本歌の一つであることは、やはり認められてよいであろう。

乏少な資料からの推論ではあるが、右のことから、有家の手許には、家集とまではいえないにせよ、致平のある程度まとまった歌稿が存していたことが想定されようし、また、致平のようなマイナーな歌人の歌を忠定が本歌としていたことは、致平の歌稿が鎌倉初期に六条藤家の周辺で享受されていた可能性を示唆しているようにも思われる。

現存するのはわずか三首のみに過ぎないが、青年期の①から晩年の②③にまで及ぶ致平の作歌活動は、かなりの長期にわたつたものと推定される上に、①や③の詞書がごく私的で主観的な、つまりは私家集的な色彩を帯びていること、また、前述のように、叔父の盛明や異母弟の具平ら、致平の近親の親王たちの家集が他撰ながら編まれていることなども、こうした想定を補強するであろう。『惟喬親王集』や『盛明親王集』も、あまたの散逸私家集の存在を伝える『夫木抄』にさえ記載のない家集ではあるが、その伝存を証し立てていたのは、やはり鎌倉・室町期の資料であつた。現在知られているよりもはるかに多くの平安期の親王たちの歌が、中世にはなお伝えられていたのであり、その中に致平の歌稿も含まれていたと見ることは、けつして不自然ではあるまい。

それでは、致平の和歌への並々ならぬ関心は、そもそもどのようなようにして育まれてきたのであろうか。次節では、致平の生い立ちとそ

の環境に焦点を当てて、この問題について考えてゆく。

二 村上朝の後宮からの始発

致平と和歌、そして歌人たちとの関わりを端緒を考へる上で逸れがたいのが、母の更衣正妃（左大臣藤原在衡女・按察御息所）と、同母姉の保子内親王の存在である。ともに歌人としては特筆すべき事績のない人物ではあるが、以下に述べてゆくように、致平の和歌への関心は、この母と姉とを介して培われてきたところが大きいものと思われる。

正妃は村上天皇との間に二男一女（致平・昭平・保子）を儲けており、これは中宮安子の三男四女に次ぐ。左大臣にまで昇つた父を持ちながら更衣で終わっているのは、在衡の大臣昇任に先立つて没したためである。正妃については、内田千代子・高橋由記両氏の論稿に詳しいが、『栄花物語』には美貌ながら古風に過ぎて村上天皇を辟易させたという逸話もあり（巻一「月の宴」）、また、『拾遺集』によれば天皇の勘気を蒙つて長く里下がり余儀なくされていた時期もあつたようである（巻十九・雑恋・一二五九・一二六〇）、天皇との細やかな贈答歌も伝えられているもの（『村上御集』九九・一〇〇・一〇一）、総じて評価は芳しくなく、帝寵も厚かつたとはいえない。

そうした中で注目されるのは、天徳四年（九六〇）の内裏歌合において、右の方人（¹⁴）に選ばれていることである。これは増田繁夫氏が指摘するように、更衣の持つ「多分に女官的な性格」を示すもので

あるには違いないが、やや消極的ながら、正妃の和歌への愛好・造詣が一定の評価を得ていたことの証左でもあろう。事実、正妃のもとには、すでに致平の幼少期から、清原元輔・藤原元真らの歌人が出入りしていたのであり、元輔は早くも致平の真魚始に際して、

兵部卿親王のいをたうべはべりに

あま舟につりせし人もけふよりぞちとせをまつのえにわたるら

ん
〔元輔集〕I二七⁽¹⁵⁾

と詠じており、また元真は幼い致平の健やかな成長を祈って、

三宮にこちまきたてまつるとて

五月待ほどにさわみ〔づ〕まさりつ、よどのまこも、おいにけ

るかな
〔元真集〕一七八

の歌とともに粽を献じている。

右の二人のうち、元輔は致平の母方の縁戚で、最も深く交わった歌人でもある。正妃の母についての記載は史料に見出せないが、『尊卑分脈』には正妃の兄弟である国光の母を「清原高峯（高奈）」とする本もある。女」とする記述があり、この「高峯（高奈）」は、『菅家文章』に見える「縫殿助清原高峯」（巻七「左相撰司標所記」）と同一人物であろう。元輔と高峯との系譜関係は未詳ながら、後藤祥子氏が『元輔集注釈』において推測しているように、元輔が在衡の庇護を受けるにとどまらず、正妃やその所生の致平・保子にも親昵していることから推しても、正妃の母は国光と同じく清原高峯女であったと見て誤るまい。致平と元輔との関係については第四節で後述するが、『元輔集』には在衡・正妃・保子に関わる歌も多く収

められている（『元輔集』I三二・三五・二六七・二六八・二七〇）。一方の元真については、在衡・正妃らとどのような縁があつて致平に粽を献じるに至ったのかは詳らかにしがたいが、正妃が安子に子の日の若菜を奉った折には、それに添える歌二首も詠んでおり（『元真集』一八三・一八四）、やはり早くから正妃・致平母子に親近していたことが知られる。

正妃が安子に若菜を献じたという右の『元真集』のエピソードから想起されるのは、安子によって宰領される村上朝の後宮の様子を語る、

おほかたの御心はいとひろく、人の御ためなどにもおもひやり

おはしまし、あたりくにあるべきほどくすぐさせ給はず御

かへりみあり。かたへの女御たちの御ためも、かつはなさけあ

り、御みやびをかはさせたまふに、
〔右大臣師輔〕

という『大鏡』の記述である。これは安子を賛美する文脈の一節ではあるものの、傍線部は安子と他のキサキたちとの間に雅やかな交際があつたことを語るもので、前述の『元真集』に見える正妃から安子への若菜の献上もまた、そうした雅交の一端を伝えるものとして理解しうる。

このような村上朝の後宮の雰囲気は、キサキたちばかりでなく、その所生の皇女たちをも含めた活発な交際を生んだようであり、和歌の贈答も盛んに行われていた。『斎宮女御集』は、致平の母正妃・姉保子と、斎宮女御徽子女王及びその一人娘の規子内親王との深い親交を伝えている。これは第三皇女の保子と第四皇女の規子と

が、異母姉妹ながら同年で親しかったことによるものらしく、保子と親子との贈答〔齋宮女御集〕I七六・七七）は、西本願寺本・歌仙歌集本では集の冒頭を飾っており、また、正妃の喪が明けた折には、徽子から保子へ、その心境を思いやる歌〔齋宮女御集〕I一四四）が贈られてもいる。

こうした母同士・姉同士の親交が前提としてあったからこそ、後年の致平の出家に際して、

兵部卿宮入道し給へりしに、いせより

か、らでもくもるのほどをなげきしにみえぬ山ぢを思やるかな

女三宮の御さうしか、せててまつらせ給けるに、あしでな
がうたなどか、せ給て、おなじ心

みな人のそむきはてぬるよの中にふるのやしろの身をいかにせ
む

〔齋宮女御集〕I一三六・一三七）

のごとく、徽子が遠く伊勢から歌を贈ることもなかったものと思量される。そのことは、出家した致平当人のみならず、保子にも歌が贈られていることから察せられよう。〔齋宮女御集〕には、保子のほかに、資子・盛子・選子ら、多くの村上天皇の皇女たちと徽子・親子母娘との親交が記しとどめられているが、それに対して、村上天皇の皇子はわずかに致平が登場するのみである。〔齋宮女御集〕の主眼は、あくまでも保子の側に置かれており、徽子が出家した致平に歌を贈ったのも、わが娘規子と親しい保子の同母兄であるという親近感によるところが大きかったものと考えられる。

見てきたように、致平は村上朝の後宮の文化的な雰囲気の中で、

母のもとに出入りする元真・元輔らの歌人たちや、歌の贈答を通じて他のキサキたち・皇女たちと「御みやび」を交わす母や姉の姿に日常的に接しながら幼少期を過ごし、また母方の縁戚に当たる元輔の影響もあって、和歌への関心を深めていったものと思しい。ただし、ここで挙げた『元輔集』『元真集』『齋宮女御集』の例はいずれも、致平と和歌及び歌人たちとの初期の接点を示すものではあっても、致平の積極的な和歌活動を伝えるものではなかった。続いては、致平自身による能動的な歌人たちの交流、そして和歌活動への関与について見てゆくことにしたい。

三 致平親王をめぐる文化圏と歌語り

致平による和歌活動の具体的なありようを直截に伝えている資料は、以下に取り上げる『安法法師集』と『相如集』とであるが、両者に共通しているのは、致平の邸が詠歌の場となっていること、そして漢詩文と深い関わりを有していることである。

兵部卿宮にて、雨中花といふ心を

そほつとも花のしたにをやどはせんにはふ雲にこゝろそむべく

〔安法法師集〕八三三

右の詞書の「兵部卿宮」をめぐることは、断定は避けつつも致平ではないかと考証する北村杏子氏及び犬養廉・後藤祥子・平野由紀子三氏の説¹⁹⁾と、醍醐天皇の第十三皇子章明親王の方がよりふさわしいとする小野美智子氏の説²⁰⁾とが対立しており、まずはこの点についての私見を示しておきたい。

小野氏は、「雨中花」という漢詩文に由来する題を、河原院文化圏における漢詩文受容の問題と関連づけ、河原院関係者との縁の深さや漢詩文への志向などを根拠として章明説を提起しているが、こうした諸条件には章明のみならず、致平も適合している。「兵部卿宮にて」という詞書からも知られるように、この歌は河原院ではなく「兵部卿宮」邸での歌会で詠まれたものであるが、安法と元輔との親交は『安法法師集』の伝えるところであり（七七・八二）、安法が元輔を介して致平の知遇を得、その邸での歌会に列することも充分に考えられよう。また、漢詩文を愛好していた事實は、後述するように、致平についても認められる。さらに、章明の兵部卿在任期間は三年（九六一—九六四）に過ぎず、兵部卿から転じた彈正尹の在任期間の方が二十六年（九六四—九九〇）とはるかに長い。『安法法師集』の成立時期と目される永延年間（九八七—九九九）もこの二十六年のうちに含まれており、その人物が章明であることが明示しようとするならば、「兵部卿宮」ではなく「彈正宮」と記すのがごく自然ではなかったか。一方の致平は、十年（九七一—九八一）にわたって兵部卿の座にあり、結果的にこれが極官となったため、出家後も「入道兵部卿の宮」（『枕草子』）「成信の中將は」の段・『榮花物語』卷三十一「殿上の花見」と称され続けている。叙上の諸点からも、この「兵部卿宮」はやはり致平であると考えるのが妥当であろう。ここでは、致平が自邸で歌会を催したこと、その題が漢詩文に関わるものであったことを確認しておきたいが、次に掲げる『相如集』もまた、致平邸での文芸の催しと、致平と漢

詩文との関わりとを伝えるものである。

兵部卿宮御前に、人くおほかるに、もていで、はじめよりのことをかたりきこえわづらふ、いとくちごはかりけり
とて

にくげなるあさがはよりはかきみぐさこゝろをみるにおもひ
か、りぬ
（三九）

八月に、兵部卿宮・九の宮、人くあまたしてふみつくる、
草むらになくむしこゑたかけれど、なくかりよりは（をとるイ）といふ題を、こゑはいとき、にくし、人くわらひ
て、例の人

くさむらになくむしよりはたかけれどよくもきこえぬかりのひ
とこゑ
（四三）

右は、相如と、致平の姉保子の女房との一連の長大な贈答歌群（二七一—五〇）の一部である。これは木船重昭氏が「一種の猿樂言」と評する⁽²⁾ように、恋愛関係にあった相如と女房とが、致平の前で自分たちの関係を戯画化し、座興として贈答歌の形で披露してみせたもので、ここでは詞書に「兵部卿宮」すなわち致平の名が現れる二首のみを掲出した。

ここで注目されるのは、相如とともに保子の女房も致平の前に伺候し、歌の応酬を披露していることである。出家以前の致平の邸宅がどこにあったのかは不明であるが、この点から見れば、保子・致平・昭平（九の宮）の同母姉弟は同居していたものと思われる。ここに登場する保子の女房について、福井迪子・北村杏子両氏は、

一条摂政伊尹と、中務の娘井殿との間に生まれた大納言の君ではないかとしている。⁽²²⁾ 福井氏が指摘するように、この女房が『相如集』において「女三宮におかしといはる、人」(二七)と称されていること、また、当該の贈答歌群の直後に「大納言の君」(五二)の名が明示されていることから見て、その蓋然性はきわめて高いといえよう。相如は大納言の君との交際を契機として、「保子内親王を通じて致平・昭平両親王ともしたいしまじわりをするようになったのであろう」とする北村氏の推定も首肯される。

また、四三番歌の詞書に「兵部卿宮・九の宮、人／＼あまたしてふみつくる」とあるのは、後藤昭雄氏が指摘するように、⁽²³⁾ 致平が昭平とともに自邸で詩会を催したことを証するものである。さらに後藤氏は、『平安朝佚名詩序集抜萃』所収の「緑竹経寒苦」を句題とする藤原篤茂の詩序に見える「第三皇子」なる人物が致平であることを考証している。これらの点からも、致平が和歌のみならず、漢詩をも愛好していたことが知られよう。

見てきたような『安法法師集』『相如集』の詞書や篤茂の詩序から浮き彫りにされてくるのは、致平の邸でしばしば歌会や詩会が行われ、そこに一つの文芸の場が形成されていたという事実である。そうした文芸の場としての致平の邸については、夙に福井迪子・北村杏子両氏が「雅交の心おきない場」⁽²⁴⁾「当時の文人歌人達のよりつどころ」⁽²⁵⁾であったことを示唆的に述べており、また、近年高橋由記氏によって提唱されている「文化圏」という術語が想起される⁽²⁶⁾。もつとも、致平を中心とする文化圏に集う歌人たちは、元輔

を除けば、元真・安法・相如といった⁽²⁷⁾、同時代評価のさほど高くない、いわば二流の人びとばかりであって、このことは、致平と歌人たちとの交流が、あくまでも正妃・保子や元輔らの近親者を媒介とする、ごく小規模で身内のものに過ぎなかったことを、おのずから証し立てているように思われる。

なお、出家後の致平は、文化圏を形成するような歌壇的な交わりからは距離を置いたようであり、和歌を通じた交流としては、前掲の選子への贈歌のほかには、ともに左大臣源雅信女を妻としていた縁で親交が厚く、致平の一男源成信の養父でもあった藤原道長が園城寺に致平を訪ねた際の、

兵部卿親王致平世をのがれて園城寺にすみ侍りけるに、たづねまかりて侍りければ、花のいとさかりなりけるを見て

法成寺入道前摂政太政大臣

きみがりとやまぢをわけてくるわれをはなをたづぬとひとや見らむ
〔万代集〕巻十四・雜一・二七七七

の一首がわずかに知られるにとどまる。

この文化圏の一員であったか否かは不明ながら、致平と深く交わった貴顕の歌人としてその名を逸しがたいのが、藤原義孝である。致平と義孝は、一人の女性をめぐる恋のさや当てを演じたこともあり、

おなじ少将かよひ侍りける所に、兵部卿致平のみこまかりて、少将のきみおはしたりといはせ侍りけるを、のちにきき侍りて、かのみこのもにつかはしける

あやしくもわがぬれぎぬをきたるかなみかさの山を人にかられ
て
〔拾遺集〕卷十八・雜賀・一一九一

という致平を恨む義孝の歌は、「衛門内侍のもとに、この少将とな
のりて、宮のおはしたりとき、て、いひやる」(Ⅱ一八)の詞書で
『義孝集』にも収められている。⁽²⁸⁾

友人の名を騙つてその恋人のもとを訪れるという、いかにも色好
みの皇子らしい致平の振る舞いを伝える『拾遺集』『義孝集』の詞
書は、匂宮が薫の声色を真似て浮舟の寝所に忍び入る『源氏物語』
「浮舟」巻の一場面を想起させる。この義孝歌は、そうした多分に
物語的な逸話を伴って享受され、一つの歌語りとして人口に膾炙し
ていたようであり、『枕草子』「細殿に便なき人なん」の段における
中宮定子と清少納言との短連歌にも踏まえられている。若き日の致
平をめぐつて、このような色好みの皇子としての一面を伝える歌語
りが広く知られていたことは、文芸と風雅の場の主宰者にふさわし
いものといえようし、致平が同時代の人びとにどのようなイメージ
を抱かれていたのかを知る一助ともなる。

なお付言しておけば、致平は義孝の異母姉で冷泉天皇女御の懐子
が師貞親王(のちの花山天皇)を出産した折には、その七夜の産養
に、

贈皇后宮の御うぶやの七夜に、兵部卿致平のみこのきじの
かたをつくりて、たれともなくてうたをつけて侍りける

清原元輔

あさまだききりふのをかにたつきしは千世の日つぎの始なりけ

り

〔拾遺集〕卷五・賀・二六六

の歌を贈らせている。前述のように同じく義孝の異母姉である大納
言の君が致平の姉保子に仕えていたことに加え、叙上のような義孝
との交友や懐子への賀歌、さらには致平の子成信と義孝の子行成と
が深い親交を結び、のちに行成がしばしば園城寺に致平・成信父子
を訪ねていることなどによっても証されるように、致平と伊尹の子
女たちとの縁には浅からぬものがあつたようである。

四 『元輔集』の致平親王関連歌をめぐつて

本節では、既述のように致平に最も深く親昵した歌人である元輔
が致平をどのように見ていたのかについて、『元輔集』の致平関連
歌を対象として考察を加えてゆく。屏風歌集である前田家本(第二
類本)を除く『元輔集』の第一類の諸本は、晩年の元輔の自撰によ
る雑詠集を基幹としており、そこに収められた致平関連歌からは、
元輔にとって致平とはいかなる存在であつたのかを読み取ることが
できよう。致平の和歌活動そのものには直接関わらないが、その周
辺的なことがらとして、元輔という最も親しい一歌人の目に映じた
致平の像を析出することが、ここでの目的である。『元輔集』には
諸本によって歌に出入りがあり、致平関連歌を最も多く収める歌仙
歌集本(第一類第二種)・冷泉家本(第一類第四種)では五首を数
えるが、ここでは冷泉家本(『新編私家集大成』元輔Ⅰ)に拠る。

『元輔集』所収の致平関連歌のうち、年代的に最も早いものは、
すでに第一節でも引用した左の一首である。

兵部卿親王のいをたうべはべりしに

あま舟につりせし人もけふよりぞちとせをまつのえにわたるら
ん (I二七)

右は型どおりの真魚始の賀歌ではあるが、そこに清原氏の血を引く皇子の誕生を寿ぎ、その将来に期待を寄せる元輔の祈りが込められていたであろうことは想像に難くない。その致平が皇位継承とは無縁のまま、三十一歳の壮年で出家を遂げたことは、元輔にとつては慨嘆するに余りある痛恨事であったに違いないが、その嘆きを分かち合ったのは、孫の大納言の君を致平の姉保子に出仕させ、みずからも保子と贈答歌(『中務集』I一四五・一四六)を交わす間柄であった中務である。『元輔集』は致平出家に際しての中務と元輔との贈答歌を、以下のように記しとどめている。

兵部卿の宮、入道しはべりしとき、中つかさがよみてはべりし

くる、まもこひしかりける月かげをいる、山べのつらくもある
かな (I一三六)

なかつかさがよみてはべりし返本に本
月かげをいる、山べはつらからでおもひたてけむよをぞうらむ
る (I一三七)⁽³⁰⁾

贈答歌の場合には原則として元輔の歌のみを採っている『元輔集』が、ここで中務の贈歌をも載せているのは、むしろ中務が著名な歌人であることへの配慮もあろうが、致平の出家が元輔にとつての重大事であったことに鑑みての、異例の措置であるとも考えられ

よう。⁽³¹⁾この贈答歌に続く次の一首は、致平出家の報を受けて保子を訪ねた元輔が詠じたものである。

女三宮のもとにまかりて、よみはべりし

よをすて、山へいる月いらましまやかしのそらのくもらざりせ
ば (I一三八)

元輔は右のごとく詠みかけて保子を慰めつつ、悲嘆を分かち合ったものと思われるが、前出の『元輔集注釈』において後藤祥子氏が指摘しているように、致平を「月」に、致平が入山した園城寺を「山(べ)」にそれぞれ擬えて、その出家を嘆くこの歌の表現は、直前の贈答歌とも通い合っている。とりわけ看過しがたいのは、後藤氏も着目しているように、若くして出家遁世した致平が、『伊勢物語』の惟喬親王章段における、

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあら
なむ (八十二段)

の歌と、それに続く惟喬の出家と小野への隠棲(八十三段)とを踏まえて、惟喬と同じく、藤原摂関家が皇位の行方を左右する世でなかつたならば天皇にもなれたかもしれない、悲運の皇子として位置づけられていることである。元輔歌の「むかしのそらのくもらざりせば」とは、後藤氏が説いているように、「村上天皇の崩御によって権勢家のほしいままになってしまふようなことがなければ」の意を暗示するものにほかなるまい。大井田晴彦氏は、『伊勢物語』の惟喬をめぐる月の比喩を、「皇統から疎外された惟喬を自分たちの仕えるべき正統の皇嗣として語ろうとする」願望のあらわれと見て

いるが、⁽³²⁾そうした惟喬章段のあり方を踏まえている『元輔集』の致平に関わる月の比喩も、同様に理解されるべきであろう。

もとより、藤原北家傍流出身の更衣を母とする致平に、現実には皇位継承の可能性があったとはおよそ考えがたく、あくまでもことばの世界の中でのことにとどまるが、「おもひたてけむよをぞうらむる」⁽³³⁾「むかしのそらのくもらざりせば」といった悲憤慷慨調の詠みぶりは、清原氏の血を引く天皇の誕生をはかなくも夢想していた元輔の無念を滲ませており、そこに致平に託された元輔の氏族意識を読み取ることも可能であろう。致平がなぜ出家したのかは不明であるが、ここでは、致平の真意はどうであれ、元輔が致平の出家の理由を皇位継承の挫折という点に求めていることを重く見ておきたい。さらに『元輔集』は、致平が出家後に土佐に下ったこと、それに先立って元輔の桂山荘で保子と別れを惜しんだことを、次のように伝えている。

入道の兵部卿の宮、とさへくだりはべりし日、かつらといふところにて、ものがたりなどして、入道の宮くだりはべり、女三宮のまかりかへりはべりしに、よみはべりし
 かつみてもまどはれけるはゆきかへりいもせの山のおちこちのみち
 (一五三)

平安期の親王がこれほど遠方にまで下るのはきわめて異例であり、致平の土佐下向を伝えているのも『元輔集』のみであるが、皇位継承の望みを絶たれた致平が出家を遂げ、次いで土佐に下ったという『元輔集』の展開は、出家後に小野に隠棲した前出の『伊勢物語』

の惟喬の場合と同様に、おのずから一つの貴種流離譚を形成するものといえよう。『元輔集』の致平関連歌は、三つの歌群に分散しながらも、真魚始(一二七)に始まり、出家(一三六・一三七・一三八)を経て、土佐下向(一五三)に至るという順序で配列されており、⁽³⁴⁾そこには、致平が元輔にとって「仕えるべき正統の皇嗣」であったことを印象づけ、その半生を貴種流離譚の枠組みによって物語的に語ろうとする意図が込められているのではないかと考えられる。

致平に対するこうした見方は、結局のところ『元輔集』の外部に波及するものではなく、致平の影響力がやはりごく限定的なものであったことをあらためて示してもいるが、前述のように致平と義孝をめぐる歌語りを踏まえている『枕草子』が、致平の子成信を四章段にわたって活写していることは興味深い。高橋由記氏はそこに父元輔と近しかった致平の子成信に対する清少納言の親近感を看取しているが、その親近感⁽³⁴⁾は、致平・成信父子に対する同族意識に裏打ちされてきたものと考えられよう。清原氏の血を受け継ぐ「仕えるべき正統の皇嗣」であった致平とその子成信は、元輔・清少納言父娘にとつて、特筆されるべき格別の重みを持つ存在であったのである。

結語

本稿では、致平親王と和歌との関わりについて、中世における致平歌の享受、致平の和歌への関心を育んだと目される村上朝の後宮

のありよう、致平を中心とする文化圏の想定、『元輔集』の中での致平の位置づけなど、さまざまな観点から検討してきた。撰関期の親王の中で、その和歌活動についてのまとまった研究がすでに備わっているのは、元良と具平程度ではないかと思われるが、致平のようなほとんど無名の親王をめぐっても、長期にわたる作歌と、小規模ながら一定の広がりを持つ歌壇的な活動が認められることは、明らかにしえたかと思う。

致平以外にも、たとえば、伊勢との間に中務を儲け、『大和物語』にも多くの逸話が伝えられる敦慶、本稿でも言及した盛明らをはじめ、注目すべき親王は少なくない。本稿を端緒として、こうした親王たちと和歌との関わりを個別的に検討する作業を積み重ねることによって、撰関期の和歌史における親王の役割を通時的かつ巨視的に見定めてゆくことを、今後の課題としたい。

注1 致平親王の伝記については、桜井宏徳『致平親王年譜』付 関連和歌資料集成一(『成蹊大学文学部紀要』四九、二〇一四年三月)参照。

- 2 後藤昭雄『漢文学史上の親王』(『平安朝漢文学論考』桜楓社、一九八一年。補訂版、勉誠出版、二〇〇五年。初出一九七三年)。以下、単行本所収の論文で初出稿がある場合には、初出年を併記する。
- 3 『惟喬親王集』『盛明親王集』の存在については、久保木秀夫氏のご教示を得た。なお、『盛明親王集』については、和田英松『皇室御撰之研究』(明治書院、一九三三年)に言及がある。

- 4 歌集の引用は、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』(CD-ROM版)(角川書店、一九九六年)に、私家集は『新編私家集大成』(CD-ROM版)(エムワイ企画、二〇〇八年)にそれぞれ拠った。『新編私家集大

成』からの引用に際しては、仮名・漢字の表記は底本のままとすることを原則としつつ、適宜私に片仮名を平仮名に改め、濁点を付し、底本の脱字を補った場合は「」で括弧して示した。

5 中川博夫『大式高遠集注釈』(貴重本刊行会、二〇一〇年)は、高遠歌の「おもひやるこ、ろもそらに」の「同時代の例」として致平歌を挙げている。

6 『采花物語』の引用は、川口久雄序・解説『梅沢本 采花物語』一―六(古典資料類従)(勉誠社、一九七九―八二年)に拠り、適宜私に濁点・句読点を付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとした。

7 浅田徹氏のご教示による。この問題については、『采花物語』の諸注の間でも見解が分かれており、『日本古典文学大系』『采花物語全注釈』が『采花物語』の記述を誤りとして致平の歌とするのに対して、『新編日本古典文学全集』は『采花物語』の文脈に従って選子の歌としている。

8 安田徳子『万代和歌集』の歌人構成(『中世和歌研究』和泉書院、一九九八年。初出一九七七年)参照。

9 『続後拾遺集』が『万代集』を撰集資料としている可能性が高いことについては、深津睦夫『続後拾遺和歌集』(和歌文学大系(明治書院、一九九七年)の「解説」に指摘がある。

10 同様の傾向は、致平以外の醍醐・村上両天皇の皇子たちについても指摘しうる。たとえば、盛明の『新古今集』以前の勅撰集入集歌は『拾遺集』の一首のみであったが、『新古今集』以下には計五首が入集しており、具平も『千載集』までの勅撰集入集歌が計一首であったのに対して、『新古今集』では一挙に八首が採られ、十三代集には計二十三首が入集している。なお、『新古今集』に見られる延喜・天曆聖代観をめぐっては、最近の赤瀬信吾『太上天皇』という装置(平成二十六年度中古文学会秋季大会、於・京都女子大学、二〇一四年一月二日)においても、『後拾遺集』から『千載集』までの勅撰集には一首も採られていなかった醍醐・村上両天皇の歌が、『新古今集』にはそれぞれ九首・一〇首が入集していることが報告されている。

11 忠定については、大岡賢典「兼宗伝 付資雅・忠定小伝」(『流通経済

- 12 大学論集』三五―一、二〇〇〇年七月) 参照。
- 12 安田徳子『万代和歌集』下(和歌文学大系)(明治書院、二〇〇〇年)、一五八頁。なお、この忠定歌は『万代集』では③の致平歌の直前に配されておき、のちに『統拾遺集』に入集している(巻十六・雑上・一一〇四)。
- 13 内田千代子「按察御息所(勅撰集の女流歌人) 第十五回」(『学苑』一三―三、昭和女子大学光葉会、一九五一年四月)、高橋由記「和歌からみた村上朝の後宮」(倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』森話社、二〇〇〇年)。
- 14 増田繁夫「女御・更衣・御息所の呼称―源氏物語の後宮―」(『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館、二〇〇二年。初出一九八一年)。
- 15 底本(冷泉家本)は第一句を「ぬまのうみに」とするが不審。歌仙歌集本により「あま舟に」と改め、第二句「つりせしあまも」も「あま舟に」との重複を避けて、同じく歌仙歌集本により「つりせし人も」と改めた。
- 16 文章の会『菅家文章注釈 文章篇』第一冊(巻七上)(勉誠出版、二〇一四年)には「左相撰司標所記」の詳細な注釈が収められているが、清原高岑については言及がない。
- 17 後藤祥子『元輔集注釈』(貴重本刊行会、一九九四年。第二版、二〇〇〇年)。
- 18 『大鏡』の引用は、『東松本大鏡』一―六(貴重古典籍刊行会、一九五三―八一年)に拠り、適宜私に濁点・句読点を付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとした。
- 19 北村杏子「安法法師集の人々など」(『青山学院女子短期大学紀要』四〇、一九八六年一月)、犬養廉・後藤祥子・平野由紀子校注「安法法師集」(『平安私家集』(新日本古典文学大系) 岩波書店、一九九四年)。
- 20 小野美智子「安法法師集の兵部卿宮」(『国語国文』六九―八、二〇〇〇年八月)。
- 21 木船重昭『中務集 相如集 注釈』(大学堂書店、一九九二年)、二五七頁。
- 22 福井由子「藤原相如考」(『一条朝文壇の研究』桜楓社、一九八七年。初出一九七五年)、北村杏子「藤原相如伝素描」(『青山学院女子短期大学紀要』三九、一九八五年一月)。
- 23 注2後藤氏論文。なお、『平安朝佚名詩序集抜萃』については、山崎誠「平安朝佚名詩序集抜萃について」(『中世文学問史の基底と展開』和泉書院、一九九三年。初出一九八六年) 参照。
- 24 注22福井氏論文。
- 25 注19北村氏論文。
- 26 高橋由記「堀河中宮皇子の文化圏―歴史に消えた文化圏のひとつとして―」(『国語と国文学』八六―一〇、二〇〇九年一月) 以下の一連の論稿。
- 27 福田智子氏のご教示による。なお、致平周辺の歌人には、六位藏人であった相如をはじめ、藏人所に出入りしていたことがそれぞれの家集から知られる元真・元輔ら、藏人所ゆかりの人物が多い。このことは、工藤重矩「藏人所の文学的活動について―宇多・醍醐・村上朝を中心として―」(『平安朝律令社会の文学』ベリかん社、一九九三年。初出一九七二年)が指摘する「詩人歌人集団としての藏人所」と致平との関わりを想定させるが、致平と藏人所との直接の接点を示す明証は見出せない。
- 28 この歌は『実方集』では「かよひ侍りける女のもとに、さねかたとなりて、人のまかりたりけるをき、て」(二二七七)の詞書で実方の歌とされているが、仁尾雅信「実方の説話的人物像の源流について」(『古代中世国文学』二、広島平安文学研究会、一九九九年二月)は義孝歌が後人によって『実方集』に混入されたものと見ており、以後の『義孝集』『実方集』の注釈もこの説を支持している。
- 29 このことについては、赤間恵都子「成立時期について」(『枕草子日記の章段の研究』三省堂、二〇〇九年)に詳しい。
- 30 底本(冷泉家本)は第四句を「おもひたちけむ」とするが、歌意から見て「おもひたてけむ」と下二段活用の他動詞でありたいところ。書陵部藏甲本によって改める。
- 31 『元輔集』の第一類の主要な伝本は、中務の贈歌をも採る冷泉家本・歌

仙歌集本と、元輔の返歌のみを載せる西本願寺本・群書類従本・書陵部蔵甲本に分かれる。なお、この中務の歌は現存の『中務集』諸本には見出せない。

32 大井田晴彦「伊勢物語・惟喬親王章段の主題と方法」(『国語と国文学』八五―九、二〇〇八年九月)。

33 ただし、西本願寺本・群書類従本(ともに第一類第一種)の致平関連歌は、出家の折の元輔の二首(「一三七・一三八」)しかなく、詞書も「ある宮の入道したまへりしに」と致平個人を特定しうる形にはなっていない。本稿で扱いうる範囲を超えるが、諸本の間でこのように致平の扱いに温度差が見られることは、『元輔集』の問題として興味深い。

34 高橋由記「源成信について―『枕草子』と『榮花物語』を中心に―」(『大妻国文』三九、二〇〇八年三月)。

付記

本稿は、和歌文学会平成二十五年十一月例会(於・慶應義塾大学、二〇一三年一月一六日)における研究発表「致平親王とその周辺―撰定期親王の和歌活動への関わりについての一視点として―」に基づく。司会の労をお執りくださった高橋由記氏、席上ご質問くださった兼築信行氏・福田智子氏をはじめ、発表時及びその前後に貴重なご教示・ご助言を賜った方々に、記して厚く御礼申し上げます。

(とくくらい・ひろのり 本学非常勤講師)